

奈良県<sup>ごせ</sup>御所市

# 巨勢山古墳群Ⅷ

—健康増進スポーツ施設建設に伴う巨勢山281号墳の発掘調査—

令和2年(2020年)3月  
御所市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は、健康増進スポーツ施設建設に伴う事前調査として、御所市副市長（担当：御所市教育委員会事務局生涯学習課）の委託を受けて御所市教育委員会が実施した、御所市小殿に所在する巨勢山281号墳の発掘調査報告書である。
- 2 調査の体制等は次の通りである。

調査主体	御所市教育委員会	調査担当	御所市教育委員会事務局 文化財課技術職員 金澤雄太
調査期間	平成31年2月5日～3月28日	調査面積	約200㎡
- 3 現地での写真撮影、および遺物の撮影は金澤が行った。
- 4 本書の編集・執筆は金澤が行った。
- 5 発掘調査には、調査補助員として松村朋美の協力が、遺物整理・報告書作成には、松村に加え、津谷晴美の協力があった。
- 6 本発掘調査に関わる記録類および出土遺物は、御所市教育委員会事務局文化財課にて保管している。
- 7 本書における標高は東京湾平均海面（T.P.）からの値である。
- 8 本書掲載の土層断面図は、地山をグレーで表した。

## 目 次

### 例言

第1章 地理的・歴史的環境	1
第2章 既往の調査	4
第3章 調査の経過	6
第4章 調査成果	7
第5章 まとめ	12

### 参考文献

### 図版



## 挿図表 目次

図 1	巨勢山 281 号墳の位置	1
図 2	周辺の遺跡	3
図 3	巨勢山古墳群中の 281 号墳の位置	5
図 4	巨勢山 287・288 号墳出土遺物実測図	6
図 5	事業地と古墳の位置関係	6
図 6	巨勢山 281 号墳墳丘測量図	8
図 7	巨勢山 281 号墳墳丘土層断面図	9
図 8	巨勢山 281 号墳葺石平面・立面・断面図	10
図 9	巨勢山 281 号墳出土遺物実測図	11
表 1	巨勢山 281 号墳出土遺物観察表	11

## 図版 目次

図版 1	1 調査地遠景（北から）	4 同（西側墳裾）
	2 同（南から）	5 同（東側墳丘斜面）
	3 調査地伐採前（北から）	6 同（東側墳頂）
図版 2	1 調査地伐採後（北から）	7 南北アゼ東壁土層断面（南側墳裾）
	2 全景（北から）	8 同（南側墳頂）
	3 同（西から）	図版 6 1 南北アゼ東壁土層断面（北側墳頂 1）
図版 3	1 葺石検出（北から）	2 同（北側墳頂 2）
	2 同（西から）	3 同（北側墳丘斜面 1）
	3 同（東から）	4 同（北側墳丘斜面 2）
図版 4	1 墳丘東側転落石（北から）	5 同（北側墳丘斜面 3）
	2 墳丘南側転落石（西から）	6 同（北側墳裾 1）
	3 同（東から）	7 同（北側墳裾 2）
図版 5	1 東西アゼ北壁土層断面（西側墳頂）	8 墳丘南側攪乱坑（南から）
	2 同（西側墳丘斜面 1）	図版 7 巨勢山 281 号墳出土遺物
	3 同（西側墳丘斜面 2）	（上：外面 下：内面）



# 第1章 地理的・歴史的環境

## (1) 地理的環境 (図1)

**御所市の位置** 御所市は奈良県の中部に位置する面積 60.58km<sup>2</sup> の都市であり、北は葛城市・大和高田市、西は大阪府千早赤阪村、南は五條市、東は橿原市・高取町・大淀町に接している。市域の北部は低平な奈良盆地の西南端に位置し、西部には金剛・葛城山がそびえ、南東部には竜門山地西端にあたる巨勢山などの丘陵に跨る。地形的には、市の南に中央構造線がはしる、内帯と外帯の接する地域といえ、自然景のみならず人々の生活や風習等において奈良盆地と吉野山地との漸移・連結地帯をなしている(堀井 1965)。また、盆地各所への利便性もさることながら、西は金剛・葛城山の間にある水越峠を通じて大阪方面へつながり、南は風の森峠を越えて五條・吉野・和歌山方面へ至る、交通の結節地としても重要な役割を果たしている。

**巨勢山 281 号墳の立地** 今回調査を行った巨勢山 281 号墳は、広くは奈良盆地の南西端、領下花崗岩を基盤とする巨勢山丘陵上に群在している巨勢山古墳群中の 1 基である。

巨勢山 281 号墳の東側には、国道 24 号線から南東に向けて延びる県道 215 号古瀬小殿線が敷設されており、それにより巨勢山丘陵から切断され独立丘陵状を呈している。古墳の西側には近世の下街道が南北に走り、南河内から吉野方面へ向かう街道であった水越道と古墳の少し南側で交っており、当地が古くから交通の要衝地であったことが窺える。

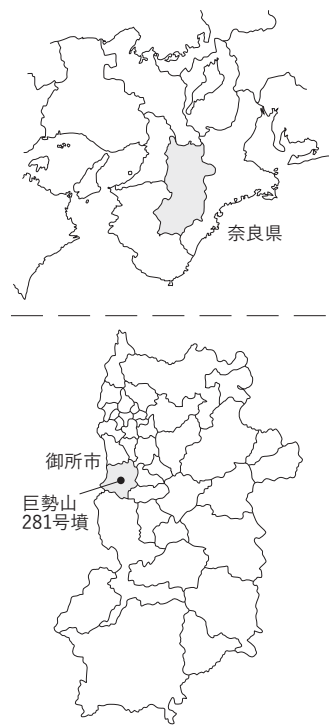


図1 巨勢山 281 号墳の位置

## (2) 歴史的環境 (図2)

**縄文時代** 御所市域では旧石器時代の遺跡は現状で確認されておらず、縄文時代になって初めて人類の痕跡を見出すことができる。明確な遺構が確認されている遺跡はそれほど多くないが、観音寺本馬遺跡において後期の竪穴式住居や土壙墓、晩期の平地式住居や水場遺構、土器棺墓群(本村 2009、岡田編 2013、木許・西村編 2015)、玉手遺跡において晩期の平地式住居や土器棺墓群が検出されており(木許ほか編 2017)、近接する橿原市曲川遺跡なども含めて具体的な集落の様相について議論できる下地が整ってきている。またこれら遺跡では、前者で半裁柱、後方で漆塗糸玉といった北陸地域でみられる遺構・遺物が多く確認されており、当時の交流の一端が窺われる。加えて、伏見遺跡では中期末～後期中葉(廣岡・十文字 2005)、南郷遺跡地蔵谷地区では中期末～後期初頭の土器が多く出土しており(坂編 2000)、付近に集落の存在が想定できる。縄文時代の遺物の出土は山麓部を中心に比較的多く認められ、後期～晩期のものが多い中で前期に遡るものも少数ではあるが玉手遺跡などで確認されている(松田 1997)。

**弥生時代** 弥生時代の代表的な遺跡には鴨都波遺跡があり、遺構や遺物の豊富さから弥生時代を通じて営まれた拠点的大集落と考えられる(木許編 1992、藤田・尼子編 1992 ほか)。高地性集落では、巨勢山丘陵上に巨勢山境谷遺跡(藤田編 1985、木許編 2007 ほか)、巨勢山中谷遺跡(御所市教育委員会 1989)、巨勢山八伏遺跡(御所市教育委員会 1990)などが後期になって営まれることが知られている。また、名柄遺跡よりやや南西のところでは外縁付鈕Ⅱ式の銅鐸と多鈕細文鏡が発見されており、青銅器埋納地として古くから著名である(高橋 1919)。近年の発掘調査では、観音寺本馬遺跡において方形周溝墓群が検出され墓域の様相が(鈴木編 2014)、秋津・中西遺跡において広大な水田遺構や埋没林

が検出され生産域の様相が、それぞれ明らかとなっている（松岡 2011、岡田・松岡 2012、本村・中野 2013、岡田ほか 2013、岡田・木村 2015、岡田・中野 2015、絹島 2015）。後者については、5万㎡を超える全国でも最大規模のものであり、秋津・中西遺跡周辺が有数の穀倉地帯であったことを示していると考えられる。

**古墳時代** 古墳時代に入ると、前期では鴨都波1号墳が著名である（藤田・木許編 2001）。一辺約20mの小規模な方墳ながら、4面の三角縁神獸鏡や方形板革綴短甲、漆塗靴といった豊富な副葬品が出土した。墳丘と副葬品に見られる格差は当該期の南葛城地域を考える上で重要な視点となろう。その他にも西浦古墳（梅原 1922）やオサカケ古墳（島本 1938）、巨勢山419号墳（藤田編 2002）などが前期の古墳として知られているが、資料状況が良くないこともあり、鴨都波1号墳との関係を含めて十分に検討が及んでいない。

集落に関しては鴨都波遺跡において若干様相がわかっているものの（豊岡 1989、藤田・尼子編 1992）、その他の遺跡に関しては顕著な遺構は認められず、橿原遺跡において土坑からまとまった土器が出土している程度であった（藤田編 1994）。しかし近年の発掘調査によって、秋津・中西遺跡から前期前半の方形区画施設や独立棟持柱をもつものを含む多数の掘立柱建物、竪穴式住居が検出され（米川・菊井 2010、岡田 2011、岡田・松岡 2012、岡田・中野 2015）、名柄遺跡から前期前半の住居や良好な土器群が検出される（佐々木 2012）など、重要な成果があがってきている。

中期になると、突如として墳長238mを誇る大前方後円墳の室宮山古墳が築造される（秋山・網干 1959、木許編 1996、藤田・木許編 1999）。北側の周堤に接するネコ塚古墳という陪冢をもち（梅原 1922、関川 1989）、埋葬施設には長持形石棺を納めた竪穴式石室を有するなど南葛城地域の中でも隔絶した内容であり、その出現に対する歴史的評価は今後も慎重に議論していく必要がある。その後は、やや規模を縮小させながらも墳長149mの前方後円墳である掖上罐子塚古墳が築造されるが（楠元編 1978ほか）、その立地が曾我川流域へと移る点は先行する室宮山古墳との関係を考える上で注意が必要である。また、室宮山古墳の東側に位置する径約50mの円墳であるみやす塚古墳も、室宮山古墳との前後関係が難しいが興味深い存在である（網干 1959）。

中期の集落としては、金剛山東麓の扇状地上に広がる南郷遺跡が特筆されよう（坂編 1996ほか）。広い範囲に居住・生産・祭祀の要素が散在しているとともに、渡来系要素の強い集落であり、葛城氏の支配拠点と考えられている。南郷遺跡内に所在する極楽寺ヒビキ遺跡では、室宮山古墳で出土した家形埴輪に類似する構造の建物跡が検出され、古墳の被葬者と集落との関係を考える上でこの上ない成果といえる（北中編 2007）。その他にも、名柄遺跡で首長居館と考えられる遺構が（藤田 1991）、鴨神遺跡において中期後半と考えられる道路遺構が確認されている（近江編 1993）。

後期は大型古墳の分布が変化し、巨勢谷に大型の横穴式石室墳が築造されるようになる。主要なものとして、樋野権現堂古墳（佐藤 1916、河上 2001）、新宮山古墳（奈良県教育委員会 1980ほか）、水北古墳（河上 1978）、水南古墳（網干 1961bほか）があげられ、高取町域の市尾墓山古墳（河上編 1984ほか）、市尾宮塚古墳（木場編 2018）なども含めて巨勢氏との関連が想定されている。條ウル神古墳は、それらと地理的にはやや離れているが、横穴式石室の形態が巨勢谷のものに類似するとの指摘があり、その破格の規模とともに注目されている（御所市教育委員会編 2003、金澤編 2019）。條ウル神古墳との関連では、正報告の刊行が待たれるものとして、条池北・南古墳が存在する（田中 1984）。特に条池南古墳については、條ウル神古墳と同様、横穴式石室の平面形が巨勢谷の例と類似し、家形石棺においても石枕を作り付ける点で樋野権現堂古墳と共通点がある。條ウル神古墳の周辺地域と巨勢谷とのつながりを考える上で外すことのできない古墳といえよう。

群集墳に関しては、総数700基を超える巨勢山古墳群（藤田編 1987ほか）や葛城山東方の独立丘陵上に立地する石光山古墳群（河上ほか編 1976）、葛城山東側斜面の尾根上に位置する小林古墳群（藤田 1987）や石川古墳群（白石 1974、金澤ほか 2019）、吐田平古墳群（網干 1961a）、金剛山の東側斜面尾





1. 巨勢山 281 号墳 2. 観音寺本馬遺跡 3. 玉手遺跡 4. 伏見遺跡 5. 南郷遺跡 6. 鴨都波遺跡 7. 巨勢山境谷遺跡 8. 巨勢山中谷遺跡  
 9. 巨勢山八伏遺跡 10. 名柄遺跡 11. 名柄銅鐸・銅鏡出土地 12. 中西遺跡 13. 鴨都波 1 号墳 14. 西浦古墳 15. オサカケ古墳 16. 橋原遺跡  
 17. 秋津遺跡 18. 室宮山古墳 19. ネコ塚古墳 20. 掖上籬子塚古墳 21. みやす塚古墳 22. 極楽寺ヒビキ遺跡 23. 鴨神遺跡 24. 権現堂古墳  
 25. 新宮山古墳 26. 水泥北古墳 27. 水泥南古墳 28. 條ウル神古墳 29. 巨勢寺 30. 二光寺廃寺 31. 朝妻廃寺 32. 高宮廃寺跡 33. 今出遺跡  
 34. 茅原中ノ坊遺跡 35. 新村・柳原遺跡 36. 萩之本遺跡 37. 川西根成柿遺跡 38. 新堂遺跡 39. 脇田遺跡 40. 太田遺跡 41. 市尾墓山古墳  
 42. 市尾宮塚古墳 43. 火振山古墳 44. 北花内大塚古墳 45. 屋敷山古墳 46. 二塚古墳 47. 平林古墳 48. 梶山古墳 49. 鳥屋ミサンザイ古墳  
 A. 巨勢山古墳群 B. 石光山古墳群 C. 小林古墳群 D. 石川古墳群 E. 吐田平古墳群 F. 北窪古墳群 G. ドンド垣内古墳群 H. 笛吹古墳群  
 I. 山口千塚古墳群 J. 寺口忍海古墳群 K. 寺口千塚古墳群 L. 新沢千塚古墳群

図 2 周辺の遺跡



根上に位置する北窪古墳群（末永 1932、廣岡 2002 ほか）やドンド垣内古墳群（十文字編 2007 ほか）などが存在する。これらの古墳群はおおむね古墳時代後期を中心とするものであるが、中期に築造が開始されるものや終末期にまで築造が続くものも存在している。このような状況から、金剛・葛城山東麓部は後期を中心に墓域として広く利用されていたと考えられ、それらの築造主体や古墳群間の関係等については今後の調査・検討が待たれる。

後期の集落については情報が少ないが、鴨都波遺跡や南郷遺跡で竪穴式住居などの遺構が確認できしており、集落が継続して存在していたことがわかる（藤田・尼子編 1992、阪本編 2002 ほか）。ただし、集落の規模などはよくわかっていないため、今後の調査成果に期待するところが大きい。

**古 代** 古代には寺院の造営が盛んに行われている。伽藍配置が復元できるものは巨勢寺に限られるが（河上・木下編 2004）、近年の調査で新たに検出された二光寺廃寺（廣岡 2006）では、金堂と考えられる礎石建物の一部が検出されるとともに、その周囲から多量の埴輪や瓦が出土し、大きな成果が上がっている。その出土瓦の中には、近隣の朝妻廃寺（前園ほか 1978、前園 1981）、高宮廃寺（松田ほか 1993）の瓦と同範のものがあり、密接な関連を有する可能性が考えられる。

## 第 2 章 既往の調査

巨勢山古墳群全体の調査歴については、既刊の報告書の中で詳しく述べているため（藤田編 2002、御所市教育委員会 2012）、ここでは今回調査地の近傍に限定して、調査成果を振り返ることとする。

281 号墳は巨勢山古墳群の中でも南西部に位置するが、その周辺は既に御所工業団地や御所市クリーンセンター、市民運動公園などの開発が昭和から平成にかけて行われており、大きくその景観が変わってしまっている（図 3）。

**国道敷設時の不時発見** その中で巨勢山古墳群最初期の調査として、281 号墳からおおよそ 300 m 北西、昭和 33・34 年の国道 24 号線敷設時に不時発見された 287（小殿 2 号墳）・288 号墳（小殿 1 号墳）がある。両者とも発掘調査はなされておらず、発見者への聞き取りと出土した遺物に関する報告のみがなされている（図 4、網干 1960・1961c）。

287 号墳は、石室材になるような石材の存在が確認されておらず、大小の鉄釘が計 5 点出土していることから木棺直葬の埋葬が想定される古墳である。出土遺物には須恵器の台付壺 1 点、広口壺 1 点、坏身 4 点、土師器壺 1 点、袋状鉄斧 1 点があり、坏身に TK43 型式期（田辺 1966・1981）のものを含むことから 6 世紀後葉頃の年代が考えられる。

288 号墳も石室のような施設は認められず、棺材と思われる片岩がみつまっていることから、箱式石棺の直葬であったと考えられる。ただし、正確な出土位置が分からないものの、鉄釘と思われる資料が若干数出土しているようで、報告者は箱式石棺内に更に木棺を収めていた可能性を指摘している。出土遺物には須恵器の短頸壺 1 点、蓋坏 2 組、土師器壺 2 点、把手片 1 点があり、蓋坏に MT15～TK10 型式期のものを含むことから 6 世紀前半頃の年代が考えられる。

**未調査のまま破壊された古墳** 281 号墳と同一尾根上にあった 270～280 号墳については、昭和 48 年の踏査の際は 270～273 号墳が全壊、274 号墳と 280 号墳が半壊とされ、それら以外の古墳については現地で墳丘を認識出来ていたようである。しかし、昭和 59 年の分布調査の時にはそれら全てが消滅と報告されており（田中 1984）、その間に発掘調査を経ぬまま破壊されてしまったようである。

**工業団地開発に伴う発掘調査** 281 号墳の北方、現在御所工業団地が存在する地点は、昭和 62 年に発掘調査が行われた。残念ながら正式な報告書が刊行できていないため、その内容については現地調査時の説明会資料に依らなければならないが、それによると 282・283・289～292・767 号墳の 7 基について調査が行われており、その中でも 282・283 号墳が 281 号墳の北に隣接する尾根上の古墳とみられる（御所市教育委員会 1987）。



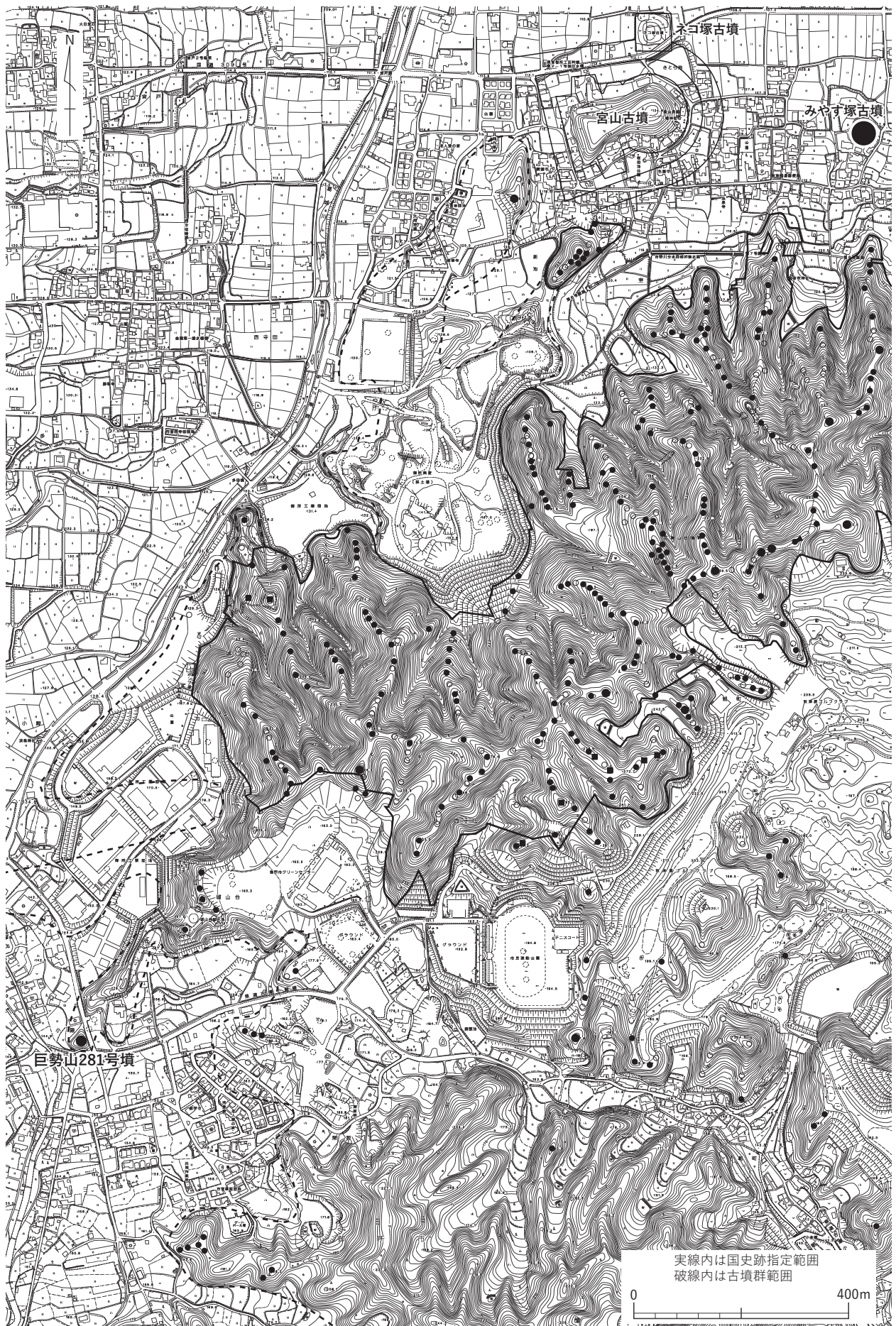
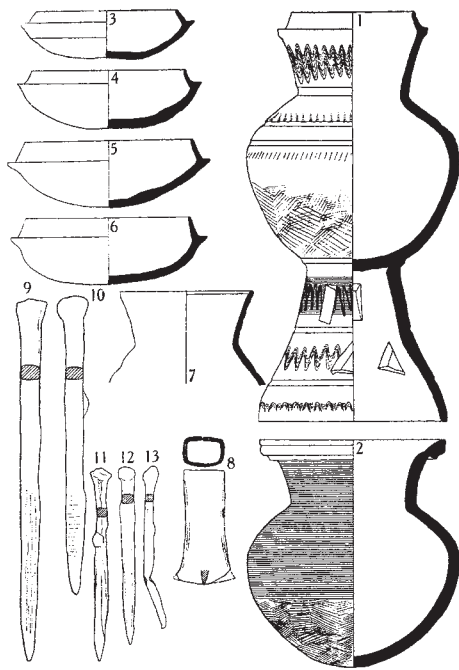
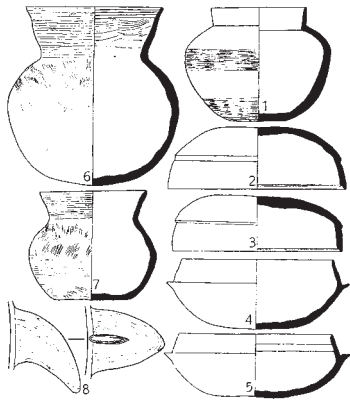


図3 巨勢山古墳群中の281号墳の位置





巨勢山 287 号墳



巨勢山 288 号墳



図4 巨勢山 287・288 号墳出土遺物実測図

282 号墳は、径 12 m 程度の円墳で埋葬施設の詳細はよく分かっていない。墳丘の流出土中から円筒埴輪や須恵器が出土しているようで、それらから 5 世紀末葉の年代が考えられている。

283 号墳は、径 10～15 m の楕円墳で中心的な埋葬施設は削平により失われていたが、墳丘南方の斜面裾で副次的な埋葬施設と考えられる無袖式の横穴式石室が検出されている。石室内には榛原石を用いた箱式石棺が納められており、北頭位で埋葬された青年男性の人骨が遺存していた。棺外副葬品として須恵器の長頸壺 1 点、小型高坏 1 点、坏蓋 3 点、坏身 5 点が出土しており、それらの型式からこの副次埋葬は 7 世紀中葉の年代が考えられている。

**小 結** このように 281 号墳の周囲における調査事例は限定的であり、発掘調査を経ぬまま破壊されてしまった古墳が多いことから、尾根ごとの特徴などを抽出することは困難な状況といえる。

巨勢山古墳群はその規模が示すとおり、長期間にわたって様々な集団が古墳を造営していたと考えられ、時期ごとの立地や内容といった造墓動向をしっかりと整理し、その展開を跡づけなければ正確な歴史的評価はできないと考えられる。本報告のような調査事例を積み重ねるとともに、未報告資料の再整理についても今後進めていく必要がある。

### 第 3 章 調査の経過

#### (1) 調査にいたる経緯

本発掘調査の契機は、平成 30 年 11 月 14 日、御所市長 東川裕氏から、御所市小殿 120 番地ほかにおける健康増進スポーツ施設建設を目的とする発掘通知（第 94 条第 1 項）が提出されたことによる。当該地の南端部には、巨勢山 281 号墳（『奈良県遺跡地図』16D - 0581）が半壊状態で所在していた（図 5）。

今回工事内容は、巨勢山 281 号墳が所在する丘陵全体を削平し、その位置に施設本体を建設するものとなっていた。事前協議において、敷地内の施設配置を変更することで丘陵を削平せずに事業を進めることができないか検討を行ったが、提出された施設配置から計画を変更して事業を実施することは困難であるとの回答があった。

このような状況から、当市教育委員会は、施工前の

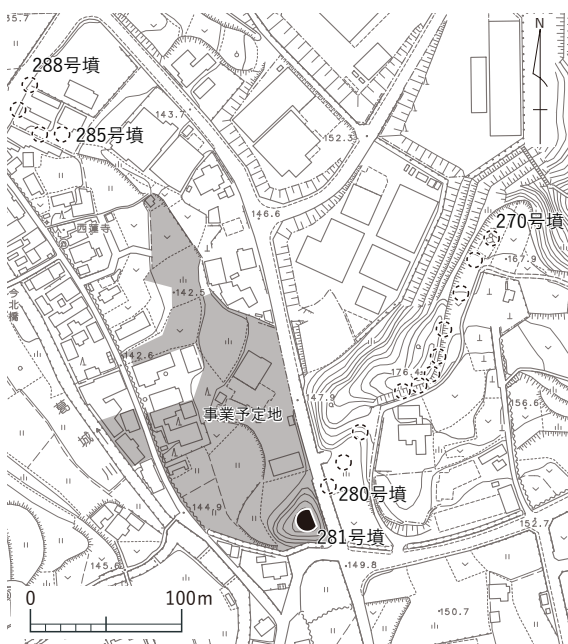


図5 事業地と古墳の位置関係



発掘調査が必要であるとの意見書を付して、提出された発掘通知を平成 30 年 11 月 15 日付で奈良県教育委員会に進達した。対して、奈良県教育委員会から平成 30 年 12 月 14 日付で「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」があった。

その後、現地調査に至るまでの間、事業者と現地での打ち合わせを重ね、当市教育委員会からの「発掘調査の通知」を平成 31 年 1 月 23 日付で提出した。

現地での発掘調査は、平成 31 年 2 月 5 日～同年 3 月 28 日の間に行い、実働日数は 30 日である。

## （２）発掘作業の経過

古墳を含む丘陵上には、昭和 50 年代頃に行われたと思われるヒノキの植林が残っていたため、現地での作業は、それら立木を伐採し見かけの墳丘の範囲を確認する作業から始めることとした。その結果、径 20 m 弱の円丘と思われる高まりが認識できたため、その見かけの墳丘中心より十字に土層観察用のアゼを設定し、掘削を進めていった。ただし、墳丘東側の一部に削平が認められたため、実際には見かけの中心よりやや南側に中心点をずらしている。

掘削に際しては、これら土層観察アゼに沿ったサブトレンチ等を適宜設定し、下層堆積の存在を確認しながら、全体の掘削を進めていった。また、遺物の取り上げに際しては、原位置を保っているものが無かったため、北西・北東・南西・南東という十字アゼによる 4 つの区画に分け、その中で墳頂や墳裾といった大まかな出土位置により区別した。

地形の制約もあり、掘削は全て人力で行い、掘削途中は層理面での遺構検出に努めるとともに、検出した遺構や土層の堆積状況について適宜写真・図面による記録を作成した。現地での写真撮影では、白黒・カラーリバーサルフィルムの中判カメラおよびフルサイズのデジタル一眼レフカメラを用いた。

以上のような経過をたどり、3 月 28 日に現地での調査を全て終え、機材等の撤収を行った。

## （３）整理作業の経過

調査終了後、直ちに報告書作成に向けての整理作業を開始した。出土遺物は細片がほとんどであったが、若干でも器種等の情報を引き出せたものに関しては可能な限り図化の対象とした。

報告書の作成には各種ソフトウェアを使用し、遺構・遺物についてはデジタルトレースを行った。遺物の写真撮影では、フルサイズのデジタル一眼レフカメラを用いた。

# 第 4 章 調査成果

## （１）調査前の所見

本調査地は、東側に県道 215 号古瀬小殿線が南北に走っているため、一見すると独立丘陵状を呈している。しかし、地形図等から当該地を確認すると、北東にある巨勢山丘陵から南西方向に伸びる尾根の先端に位置しており、県道の敷設に伴って本体の丘陵から切り離されたものであることが容易に推測できた。

先述のとおり、古墳を含む丘陵上はヒノキの植林や下草が繁茂していたため、調査に入る前は明確な墳丘を認識することができなかったが、立木を伐採し下草を刈り取ると、径 20 m 弱の円丘と思われる墳丘状の高まりを認識することができた。奈良県遺跡地図には、上記の県道による削平を踏まえ「半壊」と表記されていたが、県道寄りの墳丘東側に若干の削平が認められる以外は、全体として大きな削平は受けていないように感じられた。墳丘中心と想定した地点から北側にかけては比較的平坦な地形が確認出来たが、それ以外の箇所では目立った傾斜変換点などを認識することはできず、露出する石材なども認められなかった。

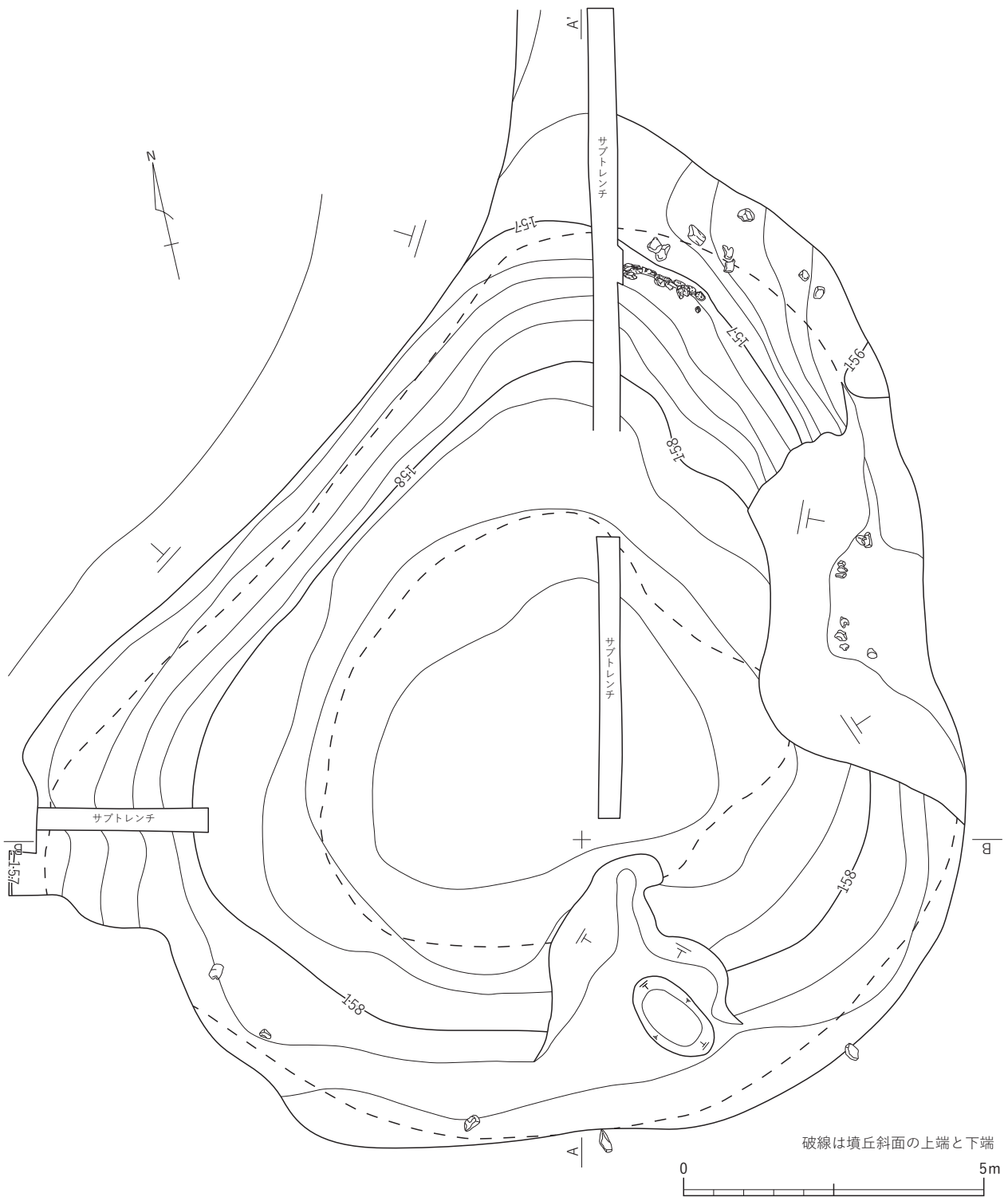


図6 巨勢山 281号墳墳丘測量図

## (2) 墳丘 (図6・7)

**土層の状況** 2～15cmほどの厚みをもった腐葉土（1層）を除去すると、墳丘全体にヒノキや笹の根による攪乱を受けた締まりの弱い黄褐色細砂（2層）が厚く堆積しており、その土層を除去した直下で締まりの強い黄褐色細砂の地山（4層）を検出した。後述する葺石との関係からは、2層とした根攪乱土の全てもしくはその一部が本来は墳丘盛土であったものと考えられるが、攪乱による真砂化のためその範囲や単位を明確にすることはできなかった。

**墳頂平坦面** 墳頂部の地山面上、標高 158.4 m から 158.7 m の範囲で径 7.0 m ほどの平坦面を確認した。

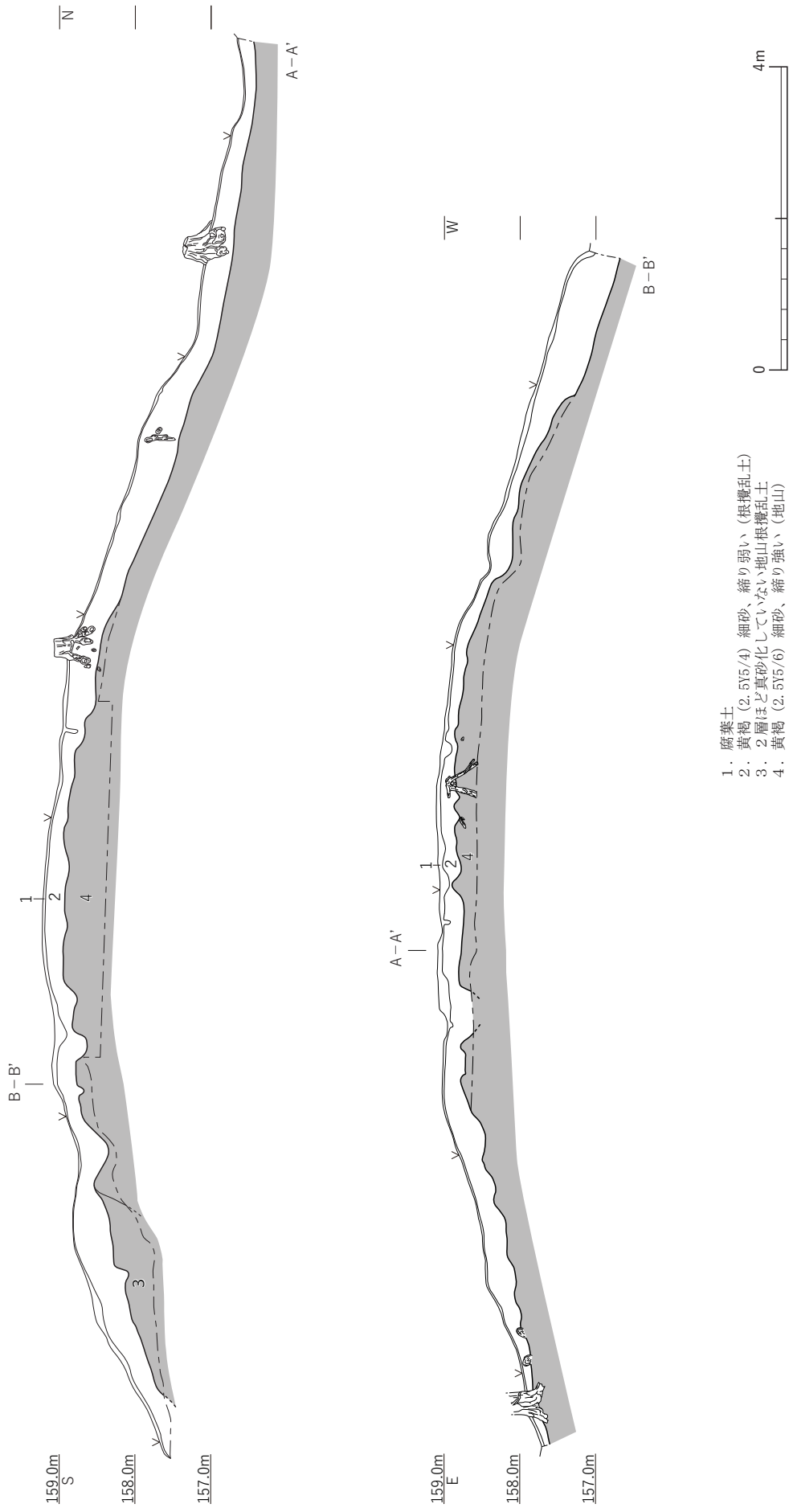


図7 巨勢山281号墳填丘土層断面図

平坦面上を平面・断面ともに精査を行ったが、埋葬施設等の遺構については確認することができなかった。過去の航空写真を経時的に確認すると、植林がなされる以前は畑など異なる土地利用がなされていたようであり、そのことを踏まえると既に墳頂部については一定の削平を受けており埋葬施設が残っていないものと考えられる。墳丘の南側、墳頂平坦面から墳丘斜面にかけては、風倒木等による大きな崖状の落ち込みがあり、その下面にはブリキのバケツやプラスチック片を含む攪乱坑が確認できた。これらは既に墳丘が広範囲に削平を受けているという想定を傍証するものといえよう。

**葺石** そのような中、墳丘の北端部付近においてヒノキの根にひっかかるような形で比較的原位置を留めた状態の葺石を検出した(図8)。長径20～30cm程度の石を積み上げたもので、平面延長は1.5m程度、最も残りの良いところで高さ約30cm、3段の石積みが残っていた。最も下部の石材は基底石と言えるような大きさのものではなく、上に載せられている石材とそれほど大差ない大きさのものである。このことは、小規模な古墳であるために基底石などを用いない葺石の葺き方をしてきた可能性と、今回検出した葺石が最下段の葺石ではない可能性の両者が考えられる。検出した葺石付近の墳丘斜面下端は、葺石よりも少し低い標高156.7～156.9mあたりで検出しており、上記のような偶然性の強い検出状態を考慮すると、後者の可能性が高いと考えられる。

葺石と土層の関係を観察すると、2・3段目の石材は腐葉土直下の根攪乱土に突き刺さるような状況が認められるため、この根攪乱土が元々は墳丘の盛土であったものと考えられる。最下段の石材は攪乱を受けた地山上に載るような状況であった。

また、原位置は保っていないものの、原位置を保つ葺石のさらに北側や、削平されている墳丘東側、そして墳丘南側の傾斜変換点あたりに転々と散乱する石材が検出された。こういった状況から、本来は墳丘の広い範囲に葺石が施されていたものと推測できる。

**墳形と規模** 墳丘の東側や北西部は地形の改変が著しく、南側についても旧道と県道の接続に伴う削平の影響が一定程度想定されるため、築造当初の正確な墳形・規模については不明と言わざるをえない。そのような前提のもと、今回の調査成果から敢えて推測すると、残存する葺石の平面形が円弧をなし、葺石北端と見かけの墳丘中心までの距離が約8.0mを測ることから、径16mほどの円墳であった可能性が考えられる。葺石よりも外側の傾斜変換点を積極的に評価するならば、もうひと回り大きな径18m程度の円墳の可能性も考えられよう。

なお、葺石よりさらに北側についても周溝の有無を確認するために掘削を行ったが、周溝状の地山の立ち上がりなどは確認できなかった。また、等高線の状況からも段築はなかったものと考えられる。

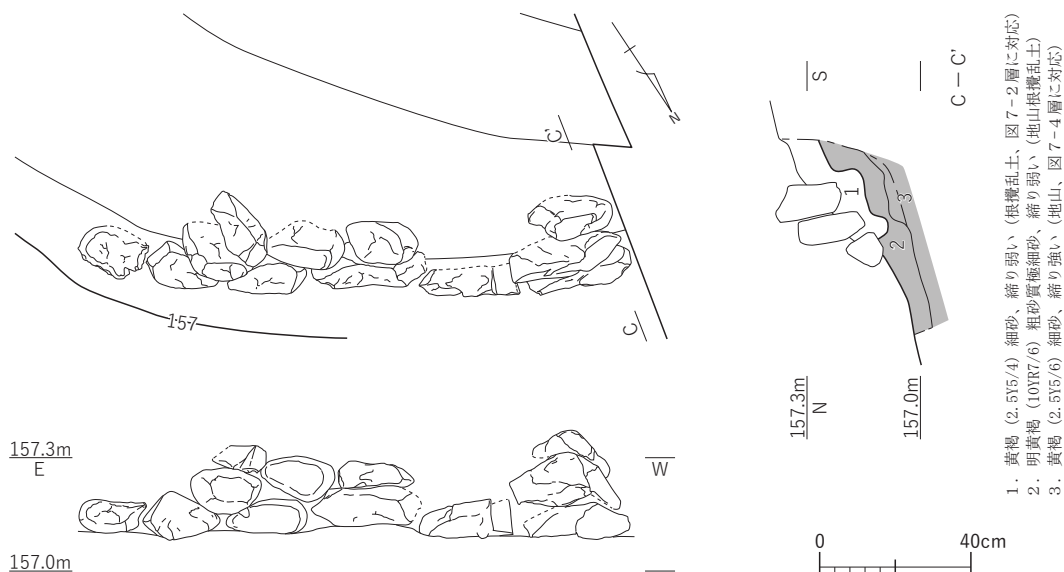


図8 巨勢山281号墳葺石平面・立面・断面図

墳丘の残存高については、地山上面で計測すると墳頂最高点の標高が158.8 m弱、墳丘斜面下端の傾斜変換点は北東部が最も低く156.0 m強、南西部が最も高く157.7 m付近であるため、およそ1.1～2.8 mである。削平の影響を考慮すると、視点の位置によっては3 mを超える高さがあったと考えられる。

### (3) 出土遺物 (図9・表1)

ほぼ全てが根攪乱土 (図7-2層) からの出土であり、明らかな現代遺物を除くと、その内訳は土師器片5点、磁器片4点、瓦片2点、埴輪片33点である。

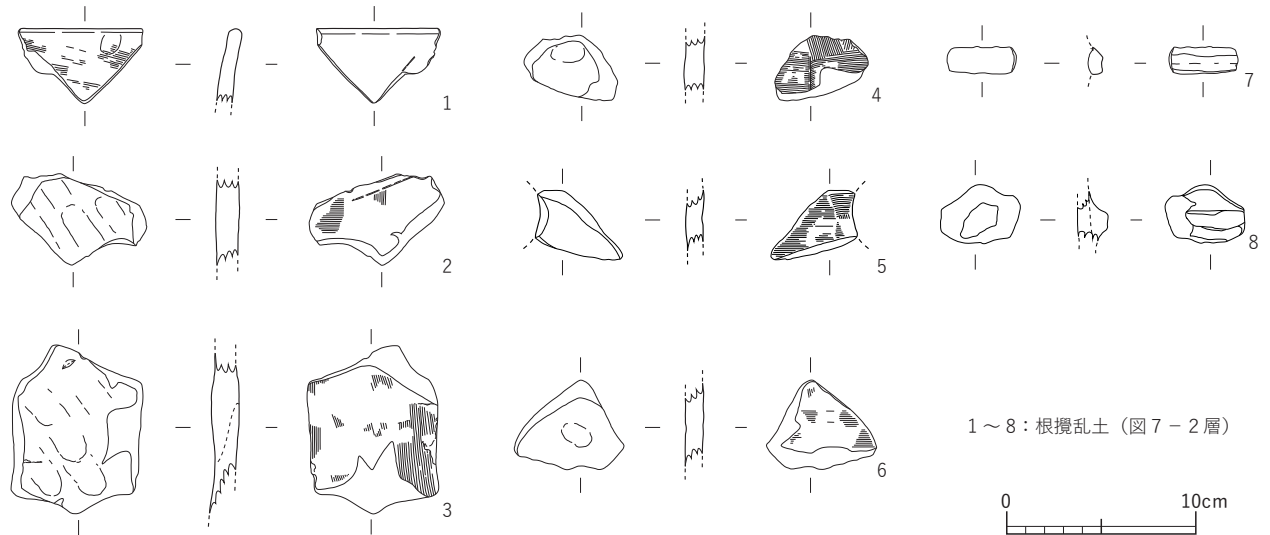


図9 巨勢山281号墳出土遺物実測図

表1 巨勢山281号墳出土遺物観察表

図-番号 器種、残存部位 出土場所	大きさ	調整 ・口縁部 ・体部 ・底部	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
9-1 円筒埴輪、口縁部 南東区 図7-2層 (埴端付近)	口径 - 残存高 3.9 cm 厚み 0.8 cm 底径 -	・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコハケ後ヨコナデ、ユビオサエ	良好	Φ 4 mm以下の白色粒1%含む	・5YR6/6 橙 ・5YR6/6 橙 ・5YR6/6 橙	・端部丸くおさめる ・外面に斜め方向の線刻あり
9-2 円筒埴輪、体部 南東区 図7-2層	口径 - 残存高 4.5 cm 厚み 1.2 cm 底径 -	・外面 タテハケ後ヨコハケ (9本/cm) ・内面 タテナデ	良好	Φ 2 mm以下の白色粒1%含む	・5YR6/6 橙 ・5YR6/6 橙 ・5YR6/1 褐灰	・外面上部に工具痕らしき圧痕あり
9-3 円筒埴輪、底部 北西区 図7-2層 (埴頂端)	口径 - 残存高 8.5 cm 厚み 1.5 cm 底径 -	・外面 タテナデ (9本/cm) ・内面 タテナデ	良好	Φ 3 mm以下の白色粒、Φ 1 mm以下の黒色粒・赤色斑粒1%含む	・5YR6/6 橙 ・5YR6/6 橙 ・5YR5/1 褐灰	・内面に成形時についたと思われる爪痕あり
9-4 円筒埴輪、体部 北西区 図7-2層 (埴頂端)	口径 - 残存高 2.8 cm 厚み 1.1 cm 底径 -	・外面 タテナデ (9本/cm) 後 ヨコハケ (10本/cm、静止痕あり) ・内面 ナデ、ユビオサエ	良好	Φ 1 mm以下の白色粒1%含む	・7.5YR6/6 橙 ・7.5YR6/6 橙 ・7.5YR7/1 明褐灰	
9-5 円筒埴輪、体部 南西区 図7-2層 (埴裾)	口径 - 残存高 2.7 cm 厚み 0.9 cm 底径 -	・外面 タテナデ後ヨコハケ (9本/cm) ・内面 ナデ	良好	Φ 2 mm以下の白色粒・無色粒1%含む	・5YR6/6 橙 ・5YR6/6 橙 ・7.5YR7/6 橙	・円形透孔一部残存 ・内面摩耗
9-6 円筒埴輪、体部 南東区 図7-2層	口径 - 残存高 3.8 cm 厚み 0.9 cm 底径 -	・外面 タテナデ後ヨコハケ (9本/cm) ・内面 ナデ、ユビオサエ	良好	Φ 2 mm以下の白色粒1%含む	・5YR6/6 橙 ・5YR6/6 橙 ・10YR6/6 明黄褐	・全体に摩耗
9-7 円筒埴輪、体部 (突帯) 南東区 図7-2層 (埴端付近)	口径 - 残存高 1.4 cm 突帯高 0.7 cm 底径 -	・外面 ヨコナデ ・内面 -	良好	Φ 2 mm以下の白色粒1%含む	・5YR6/6 橙 ・5YR6/1 褐灰	・突帯が体部から剥離 ・突帯断面台形状で中央部がやや凹む
9-8 円筒埴輪、体部 (突帯) 南西区 図7-2層 (埴頂端)	口径 - 残存高 2.5 cm 突帯高 1.6 cm 底径 -	・外面 ヨコナデ ・内面 ナデ	良好	Φ 1 mm以下の白色粒・赤色斑粒1%含む	・7.5YR7/6 橙 ・7.5YR7/6 橙 ・2.5Y6/2 灰黄	・突帯断面台形状 ・全体に摩耗



確実に古墳時代に属する遺物は埴輪のみであり、原位置を保った出土状態ではないものの、墳裾付近からの出土が7割程度、墳頂平坦面の斜面寄りからの出土が3割程度である。いずれも円筒埴輪の細片であり、全体形状を推測することはできないが、部位の特徴や調整の分かる8点について図化を行った。

個々の詳細は観察表に譲るが、全体の様相をまとめると、口縁端部は目立った造作がなく、直線的におわる形状である。体部の外面調整はヨコハケのものが多く、中には不鮮明ながらB種ヨコハケと思われる静止痕が確認出来るものが含まれる。3は外面調整がタテハケのみであるが、その厚みや剥離の様相から底部付近の破片と考えられる。内面調整は縦方向のナデが主体を占め、口縁部付近のみヨコハケが認められる。5には円形と思われる透孔の一部が残存し、突帯の断面形は低平な台形状を呈する。全体に焼成は良く、内外面は橙色、断面は褐灰色を呈するものが多く、黒斑は認められない。

限られた資料ではあるものの、これら埴輪は川西宏幸の分類におけるIV群に該当し（川西1978）、細かな時期比定は難しいものの5世紀後半頃の年代が考えられよう。

## 第5章 まとめ

### (1) 巨勢山古墳群と調査地の立地

巨勢山古墳群は、竜門山地の西端、御所市のほぼ中央に位置し、総数700基を超える我が国最大級の群集墳の1つである。今回発掘調査を行った巨勢山281号墳は、巨勢山古墳群の中でも南西端に位置しており、周囲の古墳はその多くが既に破壊され消滅している。

### (2) 調査成果

径16m程度の円墳であると考えられ、段築や周溝などは認められなかったものの、墳丘北端で平面延長約1.5m、残存高約30cm、3段分の葺石を検出した。墳丘上はヒノキや笹の根による攪乱が激しく、明確な墳丘盛土は確認できなかった。

墳頂部には、径約7mの平坦面が認められたが、埋葬施設については既に削平を受けており、残存していなかった。

古墳に伴うと考えられる出土遺物には円筒埴輪の破片があり、当時の使用状況はわからなかったものの、その形態的・技術的特徴から川西宏幸による分類のIV群に該当する。

以上の内容から、巨勢山281号墳の築造時期は5世紀後半と考えられる。

### (3) 巨勢山古墳群中における位置づけ

本来同一尾根上にあり、同一支群を構成していたと考えられる270～280号墳は、発掘調査が行われないまま破壊されてしまったため、281号墳を支群中に位置づけることは困難である。本調査地の近傍で古墳の内容が一定程度わかっている事例には、287・288号墳や282・283号墳などが挙げられるが、前者は発掘調査が行われたものではなく、後者は発掘調査が行われたものの詳細な報告がなされていないため、細かな検討は今後資料の再整理を通して行っていく必要がある。

古墳群全体の調査成果に照らし比較してみると、5世紀後半の葺石をもつ円墳という内容は、今までに公表されている調査成果の中では確認できない内容であり、径16mを超える墳丘規模も古墳群中では比較的大きなものといえる。巨勢山古墳群は築造された期間が長く、築造された個々の古墳の内容も多様性に富むことが大きな特徴といえるが、少なくともその多様性をさらに広げる調査成果になったことは間違いないただろう。

巨勢山古墳群は、古墳が最も密集する北西部の約 300 基が平成 14 年に国史跡に指定されている。今回の調査地はその指定地の外側ではあるものの、本来であれば指定地内の古墳同様、古墳群の本質的価値を構成する一要素として保護されることが望ましかったことは言うまでも無い。今回は関係者間の協議がまとまらず、記録保存という手段をとらざるを得なかったため、数年後には古墳が完全に消滅することになる。巨勢山古墳群のもつ歴史的価値を考えるならば、史跡への追加指定という方法も考慮に入れながら、現状保存に向けた関係者との出来る限りの調整を今後も継続していく必要があると考えている。

## 参考文献

- 秋山日出雄・網干善教 1959『室大墓』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第十八冊 奈良県教育委員会  
網干善教 1959「御所市大字室 みやす古墳」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』第十二輯 奈良県教育委員会  
網干善教 1960「御所市小殿古墳」『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）』第三集 奈良県教育委員会  
網干善教 1961a「御所市森脇吐田平古墳群」『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）』第四集 奈良県教育委員会  
網干善教 1961b「御所市古瀬「水泥蓮華文石棺古墳」及び「水泥塚穴古墳」の調査」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』第十四輯 奈良県教育委員会  
網干善教 1961c「御所市小殿第二号古墳」『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）』第四集 奈良県教育委員会  
梅原未治 1922「大和御所附近の遺蹟研究」『歴史地理』第参拾九卷 第四號 日本歴史地理學會  
近江俊秀編 1993『鴨神遺跡－第 2 次～第 4 次調査－』奈良県文化財調査報告書第 66 集 奈良県立橿原考古学研究所  
岡田憲一 2011「秋津遺跡第 4 次調査」『奈良県遺跡調査概報 2010 年度』第二分冊 奈良県立橿原考古学研究所  
岡田憲一・絹島歩・中東洋行 2013「秋津遺跡第 6 次調査」『奈良県遺跡調査概報 2012 年度』第一分冊 奈良県立橿原考古学研究所  
岡田憲一・木村理恵 2015「秋津遺跡第 7 - 3 次調査」『奈良県遺跡調査概報 2014 年度』第一分冊 奈良県立橿原考古学研究所  
岡田憲一・中野咲 2015「秋津遺跡第 7 - 1 次・7 - 2 次調査」『奈良県遺跡調査概報 2013 年度』第 2 分冊 奈良県立橿原考古学研究所  
岡田憲一・松岡淳平 2012「秋津遺跡第 5 次調査」『奈良県遺跡調査概報 2011 年』第二分冊 奈良県立橿原考古学研究所  
岡田雅彦編 2013『観音寺本馬遺跡 I』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 113 冊 奈良県立橿原考古学研究所  
金澤雄太編 2019『條ウル神古墳－範囲確認発掘調査報告－』御所市文化財調査報告書第 56 集 御所市教育委員会  
金澤雄太・前田俊雄・絹島歩・岩越陽平 2019「葛城山東麓における群集墳の展開と多様性の意義－御所市石川古墳群・櫛羅古墳群からの視点－」『研究紀要』第 23 集 財団法人由良大和古代文化研究協会  
河上邦彦 1978「御所市水泥塚穴古墳」『奈良県古墳発掘調査集報 II』奈良県文化財調査報告書第 30 集 奈良県立橿原考古学研究所  
河上邦彦 2001「大和巨勢谷権現堂古墳の測量調査と副葬品（後期大型円墳の意義）」『実証の地域史－村川行弘先生頌寿記念論集－』大阪経済法科大学出版部  
河上邦彦編 1984『市尾墓山古墳』高取町文化財調査報告第 5 冊 高取町教育委員会  
河上邦彦・亀田博・千賀久編 1976『葛城・石光山古墳群』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第 31 冊 奈良県教育委員会  
河上邦彦・木下亘編 2004『巨勢寺』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 87 冊 奈良県教育委員会  
川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 卷第 2 号 日本考古学会  
北中恭裕編 2007『極楽寺ヒビキ遺跡』奈良県文化財調査報告書第 122 集 奈良県立橿原考古学研究所  
絹島歩 2015「秋津遺跡第 8 次調査」『奈良県遺跡調査概報 2013 年度』第二分冊 奈良県立橿原考古学研究所  
木許守編 1992『鴨都波 11 次 発掘調査報告』御所市文化財調査報告書第 11 集 御所市教育委員会  
木許守編 1996『室宮山古墳範囲確認調査報告』御所市文化財調査報告書第 20 集 御所市教育委員会  
木許守編 2007『巨勢山古墳群 VI』御所市文化財調査報告書第 30 集 御所市教育委員会  
木許守編 2008『平成 5 ～ 19 年度市内遺跡発掘調査』御所市文化財調査報告書第 34 集 御所市教育委員会  
木許守・西村慈子編 2015『観音寺本馬遺跡』御所市文化財調査報告書第 48 集 御所市教育委員会  
木許守・小泉翔太・村島有紀編 2017『玉手遺跡』御所市文化財調査報告書第 52 集 御所市教育委員会  
楠元哲夫編 1978「御所市掖上罐子塚前方部周濠発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1977 年度』奈良県立橿原考古学研究所

御所市教育委員会 1987『工業団地開発に伴う 巨勢山古墳群第Ⅲ次・第Ⅳ次発掘調査現地説明会資料』  
御所市教育委員会 1989『ゴルフ場開発事業に伴う 第1回 巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料』  
御所市教育委員会 1990『ゴルフ場開発事業に伴う 第2回 巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料』  
御所市教育委員会 2012『秋津地区史跡整備基本計画』  
御所市教育委員会編 2003『古代葛城とヤマト政権』学生社  
木場幸弘編 2018『市尾宮塚古墳発掘調査報告書』高取町教育委員会  
阪本晋通編 2002『鴨都波 16次発掘調査報告－附. 平成12・13年度 個人住宅建築に伴う市内遺跡発掘調査－』  
御所市文化財調査報告書第27集 御所市教育委員会  
佐々木健太郎 2012『名柄遺跡 第6次 発掘調査報告』御所市文化財調査報告書第41集 御所市教育委員会  
佐々木好直編 1999『南郷遺跡群Ⅱ』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第73冊 奈良県教育委員会  
佐藤小吉 1916『権現堂古墳』『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第三回 奈良縣  
島本 一 1938『琴柱形石製品の新例』『考古學雜誌』第二十八卷 第六號 考古學會  
十文字健編 2007『ドンド垣内古墳群』奈良県文化財調査報告書第119集 奈良県立橿原考古学研究所  
白石太一郎 1974『御所市石川古墳群』『奈良県の主要古墳Ⅱ』奈良県教育委員会  
末永雅雄 1932『南葛城郡葛城村西北窪 和田山古墳』『奈良縣史蹟名勝天然記念物調査會抄報』第二輯 奈良縣  
鈴木一議編 2014『観音寺本馬遺跡Ⅱ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第114冊 奈良県立橿原考古学研究所  
関川尚功 1989『室大墓古墳外堤部発掘調査報告』『奈良県遺跡調査概報 1988年度』第2分冊 奈良県立橿原考古学研究所  
高橋健自 1919『南葛城郡名柄發掘の銅鐸及銅鏡』『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第六回 奈良縣  
田中一広 1984『巨勢山古墳群調査概要Ⅱ』『奈良県遺跡調査概報 1983年度』第2分冊 奈良県立橿原考古学研究所  
田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ  
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店  
豊岡卓之 1989『鴨都波遺跡第7次発掘調査概報』『奈良県遺跡調査概報 1988年度』第1分冊 奈良県立橿原考古学研究所  
奈良県教育委員会 1980『新宮山古墳』『奈良県指定文化財－昭和54年度版－』  
坂 靖編 1996『南郷遺跡群Ⅰ』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第69冊 奈良県教育委員会  
坂 靖編 2000『南郷遺跡群Ⅳ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第76冊 奈良県立橿原考古学研究所  
廣岡孝信 2002『北窪遺跡』『奈良県遺跡調査概報 2001年度』第三分冊 奈良県立橿原考古学研究所  
廣岡孝信 2006『二光寺廃寺』『奈良県遺跡調査概報 2005年』第二分冊 奈良県立橿原考古学研究所  
廣岡孝信・十文字健 2005『北窪遺跡 2004－第1次調査 伏見遺跡 2004－第1・2次調査』『奈良県遺跡調査概報 2004年』第二分冊 奈良県立橿原考古学研究所  
藤田和尊 1987『御所市・小林遺跡の調査』『季刊明日香風』第23号 財団法人飛鳥保存財団  
藤田和尊 1991『奈良県御所市名柄遺跡』『日本考古学年報』42(1989年度版) 日本考古学協会  
藤田和尊編 1985『巨勢山境谷10号墳発掘調査報告』御所市文化財調査報告書第4集 御所市教育委員会  
藤田和尊編 1987『巨勢山古墳群Ⅱ－御所市みどり台総合開発事業に伴う発掘調査1－』御所市文化財調査報告書第6集 御所市企画課  
藤田和尊編 1994『橿原遺跡Ⅰ』御所市文化財調査報告書第17集 御所市教育委員会  
藤田和尊編 2002『巨勢山古墳群Ⅲ』御所市文化財調査報告書第25集 御所市教育委員会  
藤田和尊・尼子奈美枝編 1992『鴨都波 12次 概報』御所市文化財調査報告書第12集 御所市教育委員会  
藤田和尊・木許守編 1999『台風7号被害による室宮山古墳出土遺物』御所市文化財調査報告書第24集 御所市教育委員会  
藤田和尊・木許守編 2001『鴨都波1号墳 調査概報』学生社  
堀井甚一郎 1965『自然地理』『御所市史』御所市役所  
前園実知雄・関川尚功・中井公 1978『御所市朝妻廃寺発掘調査概報』『奈良県遺跡調査概報 1977年度』奈良県教育委員会  
前園実知雄 1981『御所市朝妻廃寺発掘調査概要』『奈良県遺跡調査概報 1979年度』奈良県教育委員会  
松岡淳平 2011『中西遺跡第16次調査』『奈良県遺跡調査概報 2010年度』第二分冊 奈良県立橿原考古学研究所  
松田真一 1997『奈良県の縄文時代遺跡研究』財団法人由良大和古代文化研究協会  
松田真一・近江俊秀・清水昭博 1993『御所市高宮廃寺について』『青陵』第83号 奈良県立橿原考古学研究所  
本村充保 2009『観音寺本馬遺跡－京奈和自動車道(観音寺Ⅰ区)－』『奈良県遺跡調査概報 2008年』第三分冊 奈良県立橿原考古学研究所  
本村充保・中野咲 2013『中西遺跡第18次調査』『奈良県遺跡調査概報 2012年度』第一分冊 奈良県立橿原考古学研究所  
米川仁一・菊井佳弥 2010『秋津遺跡』『奈良県遺跡調査概報 2009年度』第三分冊 奈良県立橿原考古学研究所



圖 版



1 調査地遠景（北から）



2 同（南から）



3 調査地伐採前（北から）







1 調査地伐採後（北から）



2 全景（北から）



3 同（西から）



1 葺石検出（北から）



2 同（西から）



3 同（東から）







1 墳丘東側転落石  
(北から)



2 墳丘南側転落石  
(西から)



3 同 (東から)





1 東西アゼ北壁土層断面 (西側墳頂)



2 同 (西側墳丘斜面1)



3 同 (西側墳丘斜面2)



4 同 (西側墳裾)



5 同 (東側墳丘斜面)



6 同 (東側墳頂)



7 南北アゼ東壁土層断面 (南側墳裾)



8 同 (南側墳頂)





1 南北アゼ東壁土層断面（北側墳頂1）



2 同（北側墳頂2）



3 同（北側墳丘斜面1）



4 同（北側墳丘斜面2）



5 同（北側墳丘斜面3）



6 同（北側墳裾1）

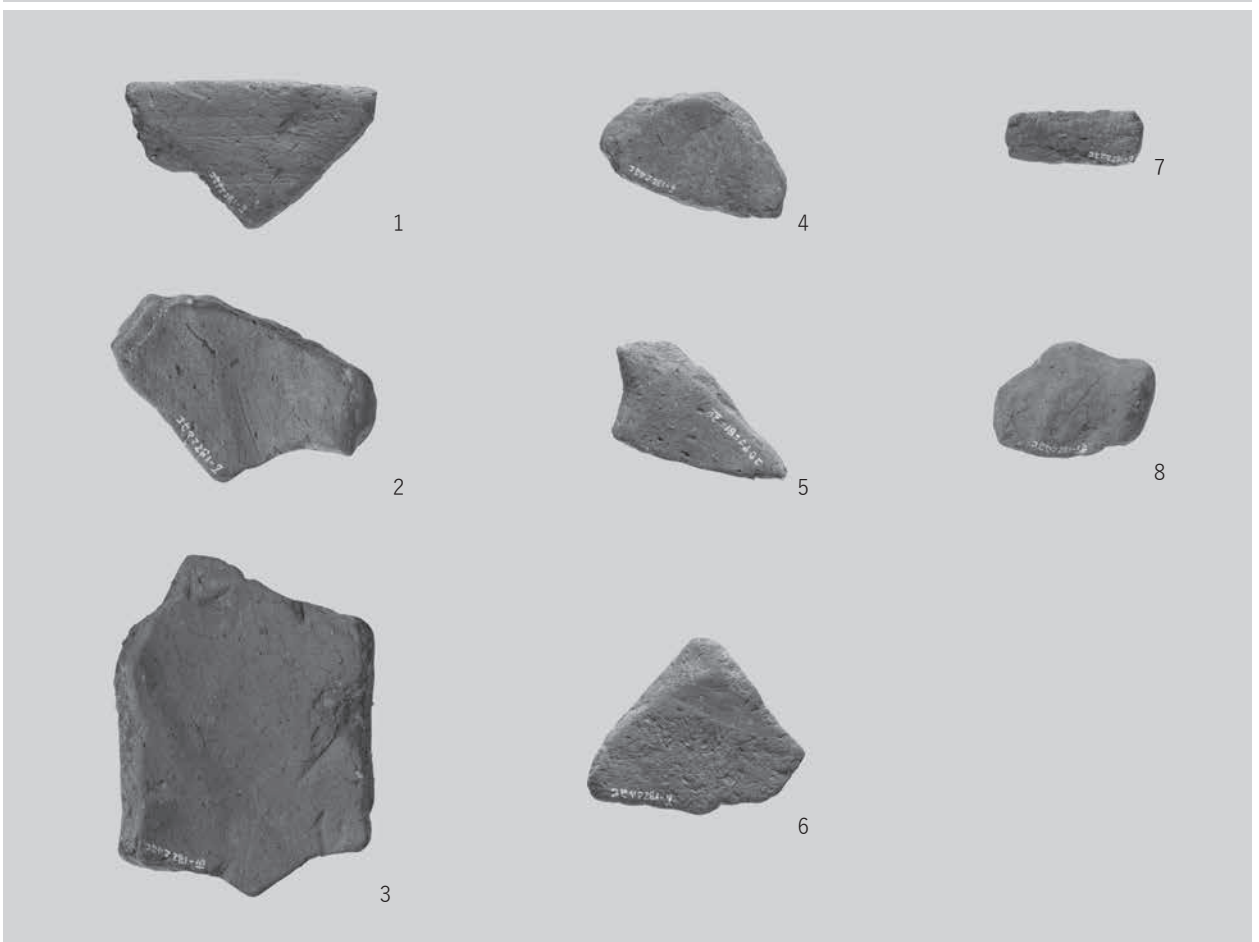
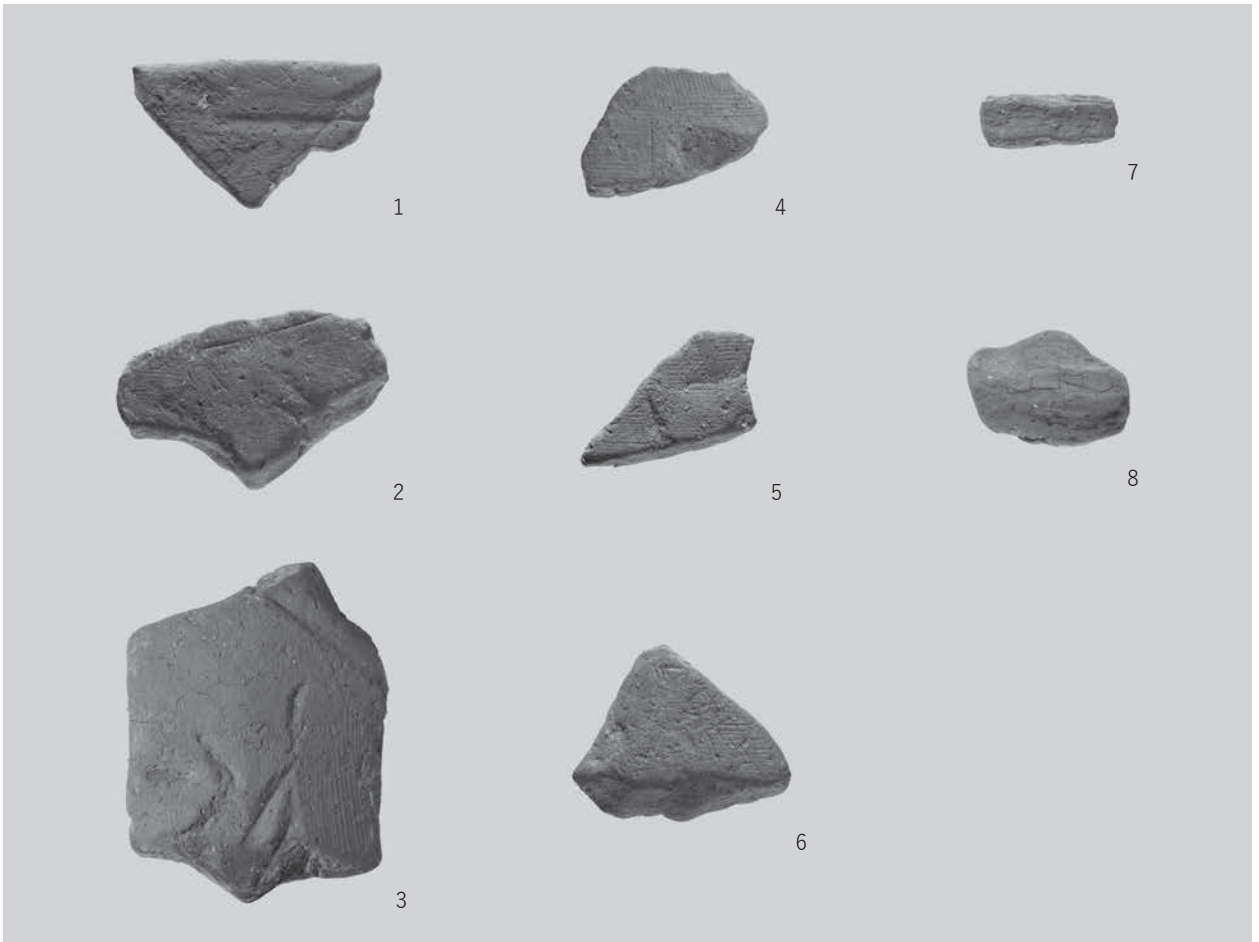


7 同（北側墳裾2）



8 墳丘南側攪乱坑（南から）





巨勢山 281 号墳出土遺物（上：外面 下：内面）

## 報告書抄録

ふりがな	こせやまこふんぐん 8						
書名	巨勢山古墳群Ⅷ						
副書名	健康増進スポーツ施設建設に伴う巨勢山 281 号墳の発掘調査						
シリーズ名	御所市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 59 集						
編著者名	金澤雄太						
編集機関	御所市教育委員会						
所在地	〒 639-2277 奈良県御所市室 102 番地 TEL 0745-60-1608						
発行年月日	2020 年 3 月 31 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
こせやま 281 号墳 巨勢山 281 号墳	こせし 御所市 おどの 大字小殿	29208	16-D-581	34° 25' 38"	135° 43' 20"	20190205 ~ 20190328 200 m <sup>2</sup>	記録保存
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
巨勢山 281 号墳	古墳	古墳	葺石	円筒埴輪 (IV群)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 径 16 m 程度の円墳</li> <li>・ 葺石一部残存、段築無し</li> <li>・ 埋葬施設は削平</li> <li>・ 5 世紀後半の築造</li> </ul>	

奈良県御所市

### 巨勢山古墳群Ⅷ

—健康増進スポーツ施設建設に伴う巨勢山 281 号墳の発掘調査—

御所市文化財調査報告書 第 59 集

令和 2 年 (2020 年) 3 月 31 日

編集・発行 御所市教育委員会  
御所市室 102 番地

印刷 株式会社 笹田印刷所  
御所市今住 16 - 3